

やぶなべ会報

自然を見つめる「やぶなべ会」(青森)発行

誌 名	やぶなべ会報
号/発行年/頁	19 / 2006 / 1-2
タイトル	【緒言】そこまで来ている?「緑の廃墟」
著 者 名	やぶなべ会会長 室谷洋司

自然を見つめる やぶなべ会 (青森)

緒言 そこまできている? 「緑の廃墟」 やぶなべ会会長 室谷 洋 司

「閉鎖されたゴルフ場を活用、『富良野自然塾』を倉本聡さん創設」— 最近の新聞からこのような見出しが目飛び込んできた。とうとう来たな、これが環境復元の一つのモデルになってくれればいいのだが、と記事に目を通した。

国内、国外に無数のゴルフ場を展開してきた大手企業が、ブームが去って続々と閉鎖に追い込まれているが、北海道富良野市郊外にある一つを、「北の国から」の脚本家として有名な同氏が6ホール分の35ヘクタールを借り受けて、自然植生に配慮した15万本の植樹を目指し、環境教育に活用するのだという。

さらに倉本さんは、「人間は、空気と水がないと生きていけない。それをはぐくんでいるのが森だ。五感でその大切さを感じて欲しい」とし、そのコンセプトを読むと地球温暖化のことを「地球高熱化」と表現したりしている。テレビドラマで広く国民の心をとりこにしてきた同氏らしい発想で、「温暖化」では生ぬるい、もっと切迫感が必要だと。

「高度経済成長」「日本列島改造」などなど。— これらを合い言葉にした戦後60年の自然環境の破壊は目に余るものがあつた。自然環境への配慮はつねに置き去りにされ、ただ滅茶めちやに走りまくった半世紀という感が強い。個々に検証するとその元凶は枚挙にいとまがないが、そのトップクラスとしてゴルフ場をあげることにそんなに異論はないだろう。

国民のたった一握りのゴルファーだけのために、その1か所の遊び場の面積の広大なこと。前述の6ホールが35ヘクタールで、この3倍あるいは6倍をも占有するのだ。しかも立地条件として交通のアクセスがよく、平坦な場所を多く含まなければならない。山麓とか海、湖に面した広大な草原が選ばれ、当然その周辺には里山が広がっていて、それらも取り込まれてしまう。高級コースであればあるほど、景勝地というか観光地の近くがねられる。いずれも自然環境が豊かで、変化に富んだ一等地だ。加えて排水処理が必要なことから下方の流域には大きな負荷をもたらし、ブーム最盛期には一面に敷き詰めたシバを管理するのに有害な農薬が使われ、ずいぶん論議を巻き起こした。

「ゴルフ亡国論」といった評論も少なくないので、これ以上深入りはしない。ただ最近、差し迫った問題になっている生物多様性維持の観点からすると、その罪深さは甚大であつた。私が長年の研究テーマにしているチョウ類から説明すると、岩木山の名蝶といわれたオオルリシジミが絶滅種となり、オオウラギンヒョウモン、チャマダラセセリ、ゴマシジミなどが危機度の高い種にあげられ、とくにゴルフ場サイトでは根こそぎ

環境が失われてしまったのだ。たかだか、蝶々ぐらいがと思うかも知れないが、チョウはそれぞれ単独で生きてきたわけではない。植生などと密接なつながりをもち、かならずや植物界にも大きなダメージをあたえ、さらに膨大な他の動物種も失われたことになる。

ミレニアム(2001年)の直前3年間は東京に住んでいて、単身赴任を満喫しようと週末の2日間は、関東圏から中部圏の野山を跋涉した。1年で50回以上、3年間で150回は優に超えたであろう。いままで見たことがないチョウや草花に出会うことが「やぶなべ人間」にとって週末を至福のひとつにしてくれた。一方、唾然となることもしばしばであった。風光明媚なところに限って殆どといって良いほど良好な自然環境がゴルフ場でおかされている。たとえば青森から空路、羽田に下りるとしよう。その直前の房総半島を飛行機は低空飛行するが、窓からはまさにアミーバのように侵されつくした風景が延々と続く。これらの現地をとくと調べてやろうと、JRからバスとタクシーを乗り継いで鹿能山、清澄山などに登った。そこには悲慘な風景が広がり、自然植生は惜しげもなく失われ、自然の林は稜線の一部や谷間にわずかしかなかったのだ。このようなむごい光景は中部から東海、近畿地方にも広がっている。怒りを乗り越えて、ブームが吹き荒れると自然もモノも区別なく独占し欲求を満たそうとする日本人のおろかさにあきれ果てるばかりだった。

このようにしてみると青森県には、さまざまな後進の利があったように思う。三内丸山遺跡、— これはもし高度経済成長のまっただなかであったなら、調べもそこそこに掘り起こされ粗末な報告書をまとめて、そのままハコモノに変わってしまっただろうし、白神の世界自然遺産にしてもスーパーハイウェーなるものが縦横無尽に緑のつながりを遮断し、いまころはブナの枯れ木の山に変わっていただろう。ゴルフ場にしても全国的には、その数はもっとも少ない方に属し、ここまでで The End。

しかし、問題はこれからだ。日本がうまく成熟社会に乗ることができたとしても、あと何年もたたないうちに、ここもあそこもと潰れていくとすれば、その後始末はどうなるのだろうか。かつて怒りを抑えながら造成地をみてまわったが、地球の悠久の歴史のなかで生み出されてきた表土は、全面を重機ではぎ取り凹凸をならし、むき出しの赤土のうえに薄い層の土壌をまぶしてはシバを植え込んでいった。このような場所では当面はススキ原に変わるだろうが、本来の姿への回復は望むべくもないだろう。

こういった意味合いからも、倉本さんの「自然塾」をこの先じっくり見ていきたいものだ。県内のゴルフ場や、これにスキー場をも加えて、これら「宴のあと」が「緑の廃墟」といった悲慘な光景になっていないことを念願するためにも…。

(2005年11月3日)